

福島敏夫随筆集

「乙戸南雑話「花鳥風月及び星・虹を愛でながら」から

主宰論説 29

資源容量・環境容量と環境調和性／持続可能性

資源容量および環境容量という考え方がある。地球の資源は有限であり、“打ち出の小槌”のように、いくらでも出せ、無尽蔵であるというわけではない（特に、金属鉱物・化石資源などの非再生資源においては、個別の可採年数がある。また、食料に供される穀物、水産物や、建築用木材となる森林などの再生産資源でも、成長の範囲内で考えるべきで、乱獲などすると、あっという間に、枯渇することにもなりかねない）。そのために、1年あたりに消費可能な資源にはある制約がある。これが“資源容量”という概念である。また、地球の浄化・自浄能力は有限であり、“慈母観音”のように、無限の愛情で、汚染を許すわけではない（特に、大気圏のCO₂濃度の増大、地圏での土壤汚染、海洋での水質汚染などにおいて）。そのために、生物が生存可能なまでに環境負荷低減を図るためには、1年あたりの環境負荷物質の平均許容廃棄・排出量にはある制約がある。これが“環境容量”という概念である。電気の分野で、電気を蓄積するための蓄電池において、無限に電気を蓄えることができるわけではなく、一定の限界を示す“電気容量”という考え方があるが、それと似ている。両者は、それぞれ、地球における資源面及び環境面からの活動の制約・限界を示し、もともと別々に論ぜられてきたが、相互に関連することもあり、資源・環境容量として、まとめて論ぜられるようになった。また、持続可能性と関連する環境調和性の多項目評価尺度の一つとして捉えられている。他方、国際連合（UN）が提唱する持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals（SDGs））の17の評価項目の一つである気候変動に対する実効性のある処置にも関連する。自由・放任的なやり方も、重要であるが、この資源容量・環境容量について考えるとき、行動・活動の中断・鈍足化も、視野に入れておく必要があることを意味する。人類の英知を期待したいものである。

自由俳句：

絵にかいた餅は遠くに虹の橋

令和4年4月22日

花鳥風月（その2）

最近、激甚化する自然災害・人災・複合災害に対する有効な対応策が、迫られている。持続可能性との両立も不可欠である。問題は、山積している。しかし、人間としては、身近の動・植物・昆虫などの動き、星・虹などの花鳥風月に対する感受性をもち続けたいものである。家の周りを散歩中で目にし、気づいた草と花と鳥に関する移ろいや、生き生きとした動きについて、情報発信をすることにしたい。先ず、1週間前、小川の土手で、土筆が勢いよく目を伸ばしていたが、今日は、すべてスギナの青い草に変わっていることに気がついた。ここでは見ることもないが、カタクリ、フキノトウなどの春の到来を告げる野の花の映像も、流れているようだ。他方、水入れの終わった近くの田んぼに、白鷺が3羽たたずんでいるのを見かけたが、散歩が終わる頃は、いなくなっていた。乙戸沼の方に

戻っていったらしい。乙戸小学校の校庭のまわりのソメイヨシノの桜並木は、既に満開を終え、葉桜に変わっている。ただ、散歩の途中で、シダレ桜や、八重桜は、まだまだ、満開の方に向かっていくように感じられた。Facebook では、桜前線が、北上し、福島、仙台を越え、青森県の弘前のほうまで行ったような情報が流れている。間もなく、函館の五稜郭の桜も満開になりそうであり、北海道も、「北国の春」になりそうである。乙戸南界隈に目を転じれば、橙色のポピーや、黄色のタンポポ、青色のムスカリや矢車草の野の花も、盛りになりつつある。住宅の庭では、白や黄色の水仙の花、赤、黄、白のチューリップの花が、盛りであるようだ。燕も既に再来しているようである。公園の一つで、休んでいるとき、シジュウカラと思われる鳥の鳴き声が聞こえた。けれど、鶯の鳴き声は、まだ聞いていない。雑木林などの生息地が少なくなっているのが、原因かもしれない。鳥と花のコラボレーションの中で、「梅と鶯」の構図は、なくなりつつあるようだ。風は、かなり強く、散歩時には、冷たさを感じるくらいであり、なかなか暖かくなれないようである。三寒四温というが、今年は、思いの外、寒暖の繰り返し幅が大きいようだ。今頃のピンクムーンという満月も、心なし、朧月のように感じる。しかし、散歩の途中で、黄色の菜の花畑では、モンシロチョウが飛んでいる姿も見かけた。自宅の庭では、牡丹の真っ赤な花も、満開になっている。いずれにせよ、花や鳥および昆虫の生き生きした姿を目にする春爛漫のようだ。

自由短歌：

夕されば月の通り路吹き飛ばすつむじ風にぞ驚かれぬる

令和4年4月22日

二刀流とトロイカ（その2）

最近、二刀流による活動が、大いに盛んであるようだ、今年も、アメリカのメジャー野球（MLB）で、とある野球選手が、投手と野手の両方における大活躍を目指しているようであり、また、期待もされているようである。昨年、ともすれば、あまりにも不透明で想定外の話が多い中で、元気を失いがちだった世の人々に感動をもたらし、オリンピック・パラリンピックとは別に、夢と希望の源となったことは、記憶に新しい。その波及効果で、歌手と俳優、建築とデザインの二刀流等もはやりだしたようだ。“この道一筋”というのも尊いし、“名人”になるためには、その奥儀を極めることが必要であり、その過程で得た技や知恵は、その道だけでなく、色々な場合における選択や判断に役立つとされる。けれども、先人、先学、先賢の業績に敬意を表し、踏襲しながらも、それを超える優れた考えかたや手法を用いて、これまで誰も考え得たことのない新たな道を目指すのも、それに引けを取らないぐらい、大変である。その意味で、異分野の融合・統合・同時実行も、意義深いと思われる。今年も、二刀流のやり方が増えるだろうと思われる。

他方、トロイカの3頭馬車方式での同時実行方式も盛んであるようだ。4頭馬車、6頭馬車方式も考えられる。とある研究者は、今なお、トロイカの3頭馬車方式の同時進行で、研究発表を続けているようである。いつまで続けられるか、見守りたいところである。

自由俳句：

トロイカを遙かに超える多頭流

令和4年4月22日